

何故、Virgil なのか

—— T. S. Eliot の意味するもの —— *

村 田 俊 一

< 序 >

Eliot はハーヴァード大学時代のラテン詩の恩師である E. K. Rand 博士¹の *Founders of the Middle Age* を *The Times Literary Supplement* で書評し、その中で、少なくとも二つのことを指摘している。一つは Cicero の重要性を強調した「異教とキリスト教文化の連続性」であり、もう一つは Rand が「滑稽な装いで」ポール・エルマー・モアー (Paul Elmer More) を皮肉ったことである。最初の指摘は、Eliot 自身の根幹にかかわることで、また本稿の論旨でもあるが、Rand が More を皮肉った理由は、More が「正統キリスト教において、ローマよりもギリシャの伝統に重きを置いた」²からである。More がギリシャに、そして Rand がラテン・キリスト教文学に心を傾けていることを考えるな

1 Herbert Howarth, *Notes on Some Figures Behind T.S.Eliot* (Chatto & Windus: London, 1965), pp.69-70.

2 '[A]t least two theses run through the whole and connect the essays. One is that the attitude of the Church towards classical culture was always double - an attitude of disapproval of pagan literature and learning was offset by one of pious preservation and enjoyment, so that Dr. Rand is able to insist upon the continuity of the classical tradition in Christianity. His other thesis appears more fitfully, and rather in the guise of jocular slaps at Mr. Paul Elmer More ... We may explain briefly that Mr. More's contention is for the superiority of the Greek over the Roman tradition in orthodox Christianity, ... In connexion with his first thesis, that of the continuity of pagan and Christian culture, he insists again and again upon the importance of Cicero to the early Christian writers.' "The Latin Tradition," *The Times Literary Supplement* (March 14, 1929)

ら、Rand の More に対する非難もわからない訳ではない。

Eliot の Rand に対する友好的な態度から見るなら、Eliot 自身、Rand の側にあり、ラテンの伝統を重視していることが推し量られる。しかし、Eliot の詩作品——特に詩劇——にも、ギリシャ神話、悲劇を素材としているものがある。ただ、Eliot がギリシャ悲劇を素材としたのは、単に、二十世紀初頭の象徴派詩人がギリシャ神話を象徴的材料あるいは不滅の物語の提供源として利用してきたのとは違って、「韻文で書かれた劇は、……詩で本質を覆い隠すのではなくて、事物の表面を取り除き、日常的な表面の現象の背後にある見えないところ、あるいは内部を曝け出そう²」とする為の手段であった。この描き出されたものは、Eliot の “Dry Salvages” II の言葉を使って言い換えるなら「肩越しに」(Over the shoulder) 見られる「原始的戦慄」(the primitive terror) であり、まさに J. Conrad の ‘The horror! the horror!’ なのである。³ ギリシャ神話は、一般に、人間の原初的記憶に根ざしている限り、また非常に古くて残酷な慣習が何らかの形で記録されている限り、精神分析学や文化人類学が展開して行く諸説の裏付けとなるものである。Eliot がこの原初的なものを追い求めようとする姿は、例えば、*Sweeney Agonistes* を上演した Hallie Flanagan への書簡の中に見受けられる。その中で、Eliot は「劇全体は、太鼓の軽い音をともなうて調子を強めようとした意図」を述べ、更に、「その劇をやる前に F. M. Cornford の *The Origin of Attic Comedy* を読むことが大切である」と付け加えている。⁴ Cornford が属しているケンブリッジ古典人類学派 (Cambridge School of Classical Anthropology) は悲劇の起源が祭儀 (ritual) にあるとい

1 H. Howarth, *Notes on Some Figures Behind T. S. Eliot*, p.69

2 S. L. Bethell, *Shakespeare and the Popular Dramatic Tradition* with an Introduction by T. S. Eliot (Duke University Press, Durham, 1944), p.iv. Cf. T. S. Eliot, “Poetry and Drama,” *On Poetry and Poets* (The Noonday Press, 1968), p.93.

3 Eliot quoted this phrase from *Heart of Darkness* as an epigraph to the MS of *The Waste Land*.

4 Hallie Flanagan, *Dynamo* (New York, 1943), p.83.

う J. E. Harrison の説¹を受け継いだものである。Eliot が「劇は宗教的な典礼 (religious liturgy) から発生したものであり、宗教的な典礼から遠く外れることはない²」と言ったことなどは、このケンブリッジ古典学派への興味の表れの一つである。従って Eliot が詩劇において、ギリシャ悲劇を下敷にしているのは、確かに、枠組として「現代と古代との間に一つの持続的な平行を置く³」神話的方法 (mythical method) があったことは否めないが、それ以上に若い頃から Eliot の根底に流れている文化人類学の基盤となっている「原始的戦慄」との出会いを詩劇という具象的な形で捉え、観客に打ち出して行ったのではないだろうか。このように考えて行くなれば、このギリシャ悲劇の素材が Eliot の詩劇の根底を支えるものとなっているとしても、彼にとって、ギリシャ悲劇は、劇作上の一つ的手段に過ぎず、彼のラテンへの傾きを否定する材料にはならないようである。

一方、Eliot は、彼がウェルギリウス協会 (Virgil Society) の会長となった 1944 年に「古典と何か」(“What Is a Classic?”) と題する講演をし、その中で、「古典」を「全体としての (*in toto*) ラテン文学とギリシャ文学、もしくはこれらの言葉で書かれた最も偉大な作家達⁵」と定義しながら、それを表す総括的な意味を「成熟」(maturity) という言葉の中に見つけている。特に「精神の成熟 (maturity of mind)」は「歴史意識 (consciousness of history)」を必要とし、「詩人の属する民族とは違った歴史がある時だけ目覚めさせられる」もの

1 Gilbert Murray, “Excursus on the Ritual forms Preseved in Greek Tragedy” in *Themis: A Study of the Social Origins of Greek Religion* by Jane Ellen Harrison (Cambridge: Cambridge University press, 1912), pp.341-363.

2 T. S. Eliot, “A Dialogue on Dramatic Poetry,” *Selected Essays* (Faber & Faber: London, 1966), p.47.

3 “Ulysses, Order, and Myth,” *Dial*, LXXV.5 (Nov.1923), p.483.

4 拙論「*The Family Reunion* における見えざる Eumenides をめぐって」『T. S. ELIOT REVIEW』No.1 (日本 T. S. Eliot 協会、1990)、pp.14-17 参照。

5 T. S. Eliot, “What Is a Classic?,” *On Poetry and Poet*, p.53.

で、これは「ローマ人が持っていた意識であり、ギリシャ人は、我々がどれほど、その文明の成果を高く評価したとしても、……持つことが出来なかったもので、ウェルギリウス彼自身こそが、この発達に貢献した意識である¹」と述べている。Eliot はこのような形で、古典の特質——「精神の成熟、生活態度の成熟、言語の成熟、共通の文体の完成²」——をラテン文学の中の Virgil に適用しているが、彼にとって Virgil はただ単なる「古典」を説明されるために使われただけではない。拙論では、ラテン中世の根幹というべき Virgil が、Eliot の詩にどのように反映されているかということを踏まえながら、その意味するものは何であるかを考察してみたい。

I

Eliot は先ほど触れた“*What Is a Classic*”の冒頭近くで「如何なる古典の定義に到達しようとも、Virgil を度外視したものはあり得ず——彼を特に考慮に入れたものでなければならぬと、確信を持って言うことが出来る³」と言っている。Eliot にとって「ギリシャ、ローマのすべての大詩人のうちで、古典に関する我々の規範について、最も我々がお陰をこうむっているのはウェルギリウス⁴」なのである。このように、Eliot が「古典」と言う時、彼の念頭には、Virgil を念頭に置いたラテン的伝統があった。このラテンに重きを置いた「古典」観は彼の文化論に深く関係している。

『戦争と平和』は非常に偉大な小説ではあるが、三人、四人の偉大な小説家が文学を作っているのではない。もしローマから由来する一切のものが取り去られるなら——我々がノルマン・フランス的社会から、教会から、

1 *Ibid.*, p.62.

2 *Ibid.*, p.60.

3 *Ibid.*, p.52.

4 *Ibid.*, p.70.

人文主義から、直接的で間接的な全ての水路から取り去られるなら、一体、何が後に残るだろうか。それはごく僅かのチュートンの根と殻である。イギリスは「ラテン的な」国である。我々のラテン的文化をフランスから輸入する必要はない。¹

その後、Eliot は1948年の *Notes towards the Definition of Culture* の中で、以上のような文化的伝統をローマ教会と結びつけて、「文化の主流」をラテンの伝統に置き、そこから分離した文化を「副次文化」(sub-culture) であると言い、そして、この「副次文化はそれらが分岐し来たったところの樹幹に依存するものである」と述べている。² 従って、Eliot にとって、「イギリス文化が維持されるかどうかは、まさにラテン・ヨーロッパの文化の健康と、そのラテン文化から生命の糧を採り続けるかどうかによるものである。」³ このような Eliot の文化の考えの背景には、先程、〈序〉で触れた「歴史意識」を忘れることは出来ない。この「意識」の欠如から「地方性」(provincial) が生まれるのである。Eliot が「我々は、他の如何なる詩人よりも Virgil に負うところが多い古典的基準を常に用いていなければ、地方的 (provincial) になってしまうのである」⁴ と言ったのは、この「歴史意識」を念頭に於いてのことであろう。つまり「ヨーロッパ文明を受け継ぐ限りは、われわれは皆いまだにローマ帝国の市民なのである。」⁵ Eliot の *On Poetry and Poets* を書評し、その中で、彼の古典を Dante より Virgil にあることを指摘した Frank Kermode ⁶ が、*The Classic* の中で、

1 T. S. Eliot, *The Criterion* II (October, 1923), p.104.

2 T. S. Eliot, *Notes towards the Definition of Culture* (Faber & Faber : London, 1967). p.73.

3 *Ibid.*, p.75.

4 "What Is a Classic?," *On Poetry and Poets*, p.71.

5 T. S. Eliot, "Virgil and Christian World," *On Poetry and Poets*, p.146.

6 Frank Kermode, "T. S. Eliot on Poetry," rev. of *On Poetry and Poets*, by T.S. Eliot, *International Literary Annual*, 1 (1958), 134.

Theodor Haecker との関係で、Eliot の作品世界を帝国理念的な意味での古典主義の世界と呼んだのは、¹ 地理的、空間的としてのローマ帝国であるばかりでなく「明確な教義あるいは規準」² (a distinctive dogma or standard) に従う精神的なものを具体的なヨーロッパと結びつけてのことであろう。Eliot の初期の評論 “Tradition and the Individual Talent” の中の「歴史的感覚」(the historical sense) の背景には、彼の若い頃、培った哲学的な時間論、歴史観、そして、それらを基盤にした認識論があったと思うが、今述べたヨーロッパ文明に対する考え方も忘れることは出来ない。Eliot にとって「ヨーロッパ文学も一つの全体であり、その個々の部分は、もし、同じ血液の流れが身体全体に循環しなくなれば、栄えることはないのである。ヨーロッパ文学の血液の流れとはラテン語とギリシャ語である——これは二つの異質の血液ではなく、一つのものである。なぜならば、我々の血統が辿られるのはローマを通してだけだからである。」³

このように、「有機的全体」⁴ (organic wholes) を基盤にした Eliot の古典に対する関心は彼の文明観、歴史観にまで及んで行くが、彼はこの中に、後から述べるように、E. Auerbach の言う「フィグーラ」(figura) の要素を孕ませているのである。この Eliot の背景には、Virgil を師父と仰いだ Dante の存在があった。Dante は Eliot に「最も永遠性のある深遠な影響」を与えた人である。

1 Frank Kermode, *The Classic* (Faber & Faber: London, 1975), pp.27-8. Cf. A letter to Ford Madox Ford from T. S. Eliot: 'The present age, a singularly stupid one, is the age of a mistaken nationalism of an equally mistaken and artificial internationalism. I am all for empires, especially the Austro-Hungarian Empire, and I deplore the outburst of artificial nationalities, constituted like artificial genealogies for millionaires, all over the world.' (Bernard J. Poli, *Ford Madox Ford and the Transatlantic Review* [Syracuse, N. Y. : Syracuse University Press, 1967] , pp.54-5.)

2 "What Is a Classic," *On Poetry and Poets*, p.72.

3 *Ibid.*, pp.72-73.

4 T. S. Eliot, "The Function of Criticism," *Selected Essays*, p.23.

Dante は、『神曲』の中で Virgil から「私に名誉を与えた美しいスタイル」¹（「地獄篇」第 I 歌85）を学んだと言って、彼の霊に導かれて辺獄に足を踏み入れ、そこで、四つの堂々たる影に出会う。Virgil は Dante に次のように説明する。

王者のように三人の先頭にたって、
手に剣を持っているものを見給え。
あれは至高の詩人オメーロである、
その後から来るのは風刺オラツイオ、
三番目はオヴィデオ、最後はルカーノだ。

（「地獄篇」第 4 歌 87-91）

E. R. Curtius は、この一節に見られるこれらの古代詩人たちの Dante との会いは、ラテン叙事文学がキリスト教的な世界詩に吸収されたことの確証であると説明している。そして、この世界詩はひとつの精神空間を包容し、それはラテン中世という世界的複合体の内に見出だされ、『神曲』はここに根付き、このラテン中世こそ古代世界から近世世界に通じるローマの道であると言っている。² 追々、詳しく述べることになるが、Eliot の Virgil 観の根本的な視点は、まさにこの異教世界とキリスト教世界の接点にある。Eliot の恩師である Rand がこの接点を Cicero に置いているのに対して、何故、Eliot が Virgil に置いたのかは、一考を要するところであるが、少なくとも、Eliot の Virgil に対する関心は、このような形で、Dante を経由することによって、深められて行ったようである。

従来まで、Virgil と Eliot との関係に触れた研究書は W. F. Jackson Knight の *Roman Virgil* (London: Faber and Faber, 1944) 以来、余り論じられる

1 邦訳は野上素一訳『ダンテ』（筑摩書房、昭和39年）によった。

2 E. R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, translated by Willard R. Trask (Princeton, 1973), p.18-19.

ことがなかった。最近出版された Gareth Reeves の *T. S. Eliot: Virgilian Poet* (Macmillan, 1989) は、1972年、Hugh Kenner が *The Urban Apocalypse* の中で *The Waste Land* の草稿を基盤にして触れた Virgil の痕跡¹、そして、Frank Kermode が *The Classic* の中で指摘した Eliot の古典に対する考え方を踏襲しながら、彼の詩に及ぼした Virgil の影響を克明に辿り、Eliot を「ウェルギリウス風の詩人」として扱ったものである。しかし、Virgil と Eliot の関係は、Dante を無視しては考えられない。Dante と異教の詩人である Virgil との「出会い」こそ Eliot にとって大きな意味を持つのである。

II

Valerie Eliot は *The Waste Land* の草稿に付けた注で、草稿で取り消された ‘In the Cage’ というタイトル——最終版では ‘A Game of Chess’——は、この詩のエピグラフにある Petronius の *Satyricon* に見られる Cumae の女予言者 Sibyl が「壺の中で」(in ampulla) ぶらさがっている一節と関係があることを指摘した。² Hugh Kenner は、これを足掛りとして *The Waste Land* の Sosostrius のカードと、*Aeneis* VI の Cumae の Sibyl が神託を木の葉に託して Aeneas に冥界に行く前に、金枝を折取るばかりでなく、溺死した友のために死者の埋葬の儀式を執り行うように命じたこととの間に類似点を見出だしている。³ そして、*The Waste Land* の最後に見られる一句 ‘These fragments I have shored against my ruins’ (l. 430) が、草稿版では ‘These fragments I have spelt into my ruins’ となっているということから Kenner は、この詩の「登場人物は、ウェルギリウスのシビルを訪れたが、その神託は、ソソシトリスのカ

1 Hugh Kenner, “The Urban Apocalypse,” *Eliot in His Time* (Princeton, 1973), pp. 23-49.

2 *The Waste Land, A Facsimile and Transcript of the Original Drafts*, edited by Valerie Eliot (Faber & Faber, London), p.126.

3 *Ibid.*, pp.38-9.

ードと同じように、断片的で風に吹き飛ばされてバラバラになった¹と述べている。Gareth Reeves は、この Kenner の研究を踏まえて一層克明に *The Waste Land* と *Aeneis* との接点を跡付けている。しかし、Eliot は *The Waste Land* のエピグラフには、先ほど見たように、Virgil ではなく、「私は死にたい」と言っている Petronius の Sibyl の言葉を引用している。もともと、Eliot は、本稿の〈序〉で触れたように、「原始的戦慄」を表わすために、この詩のエピグラフに Conrad の *Heart of Darkness* からの ‘The horror, the horror’ という一句を含む一節を考えていたが Pound の勧めにより削除することになった。何故、このエピグラフが Virgil ではなく Petronius のものになったのかは気になるところである。Kenner は、このエピグラフは原稿が書き終わってから一番最後に付け加えられたもので Virgil の痕跡を否定するのには、あまり大きな意味を持っていないようだと言っているが、それ以上に、この時期に Petronius が再評価され、*Satyricon* がブルームズベリ (Bloomsbury) 等の上流社会で大変もてはやされていたという事情も Eliot に影響したのかも知れない。³

1 *Ibid.*, p.42. Cf. ‘[I]t is difficult to believe that anyone who saw only the first four parts in their original form would believe that “the plan and a good deal of the incidental symbolism” were suggested by Jessie Weston’s book on the Grail Legend, or that *The Golden Bough* (Frazer’s, not Virgil’s) had much pertinence. If we were asked to nominate a controlling scheme, we might more plausibly guess that the pages before us had something to do with the *Aeneid*, notably its sixth book. If we guessed, from Mme. Sosostriis, that the Sibyl was present, we should surely connect her with the Sibyl of Vergil, dealing out her fragments of prophecy (*Aen.* III, 444), than with the Sibyl of Petronius entered the explicit scheme only via an epigraph that was added later than anything recorded in the manuscripts.’ (*Ibid.*, p.43)

2 Hugh Kenner, “The Urban Apocalypse,” *Eliot in His Time*, p.38.

3 ‘In the “Now It Can Be Told” epoch after the first World War staid professors of Latin, who had been schooled to value the *Satyricon* for what it tells of the ancient romance, folk Latin, and Roman private life under the Empire, were dazed to behold this work blossoming in to a veritable best seller. A canny publisher or two grasped the opportunity. In Bloomsbury, in Chelsea, in Greenwich Village, in short, among sophisticated readers everywhere, the picaresque novel of Petronius leaped into

しかし、何れにしても Kenner、そして、これを踏まえた Reeves の研究はき
はめて説得力がある。Eliot が *The Waste Land* を書いていた時 *Aeneis VI* を
念頭に置いていたことを考えるなら、*The Hollow Men* の詩にも Dante の眼
を通した Virgil の影が反映している。一般に、この *The Hollow Men* は *The*
Waste Land に見られる Dante の地獄から浄罪界を経て天国へ向かう *Ash-*
Wednesday への架け橋と見られる。E. J. Stormon は “Virgil and the Mod-
ern Poet” の中で「古典時代の夢は、『死の黄昏の王国』(death’s twilight king-
dom) を切り開くための工夫として使われ、…… (とりわけ Dante からのキリ
スト教的要素によって…… 修正された) ウェルギリウスの終末観 (Virgilian
eschatology) が含意されている¹」と言っている。このことを考えるなら、*The*
Hollow Men II で Dante が Beatrice に出会った場面 (「浄罪篇」第30歌) を念
頭に置いた「この黄昏の王国に於いて、かの究極の出会いはない」(Not that
final meeting/In the twilight kingdom) という一句は、Eliot が後の “Virgil
and the Chiristian World” の中で「失望させられないとしても、少なくとも、
我々は、ウェルギリウスとともにある種の情緒的黄昏 (a kind of emotioanl
twilight) の中を歩んで行くような感じを持つ²」と言ったことを事前に示して
いると見られよう。この Virgil に纏わる「黄昏」の持つ意味合いは Dante との
違いを暗示している。つまり、Virgil には「その深淵の中で」「全宇宙の吹き散

notoriety along with D. H. Lawrece’s *Women in Love* and Schnitzler’s *Casanova’s*
Homecoming, while in Boston the Watch and Ward Society fell to deploring the times
and the morals. Thanks to this not entirely ingenuous touting of the merits of a minor
figure in roman letters, the *Satyricon*, time was, became a drugstore classic. In
November , 1933, The Readers’s Digest ran a translation of a part of *Trimachio’s*
Dinner, and Mr. Burton Racoe has included Petronius among the “Prometheans” of
world literature.’ (D. R. Stuart, “Modernistic Critics and Translators,” *Princeton*
University Library Chronicle 11 [Summer, 1950] , p.177)

1 Quotations in this paragraph are from *T. S. Eliot: Virgilian Poet* by Gareth
Edward Reeves (Macmillan, 1989), p.60.

2 “Virgil and Christian World,” *On Poetry and Poets*, p.148.

らされた木の葉が集められ、愛によって一つの塊に結ばれている」「ヴィジョン」が与えられなかったのである。¹ Eliot は「『神曲』にあって『アエネーイス』にない基本用語が何であるのか」と自問して、それを「光明 (lume) および光の精神的意義を表わす全ての言葉」であると言っている。そして Dante と Virgil の違いを、更に「ウェルギリウスに見出だされないことが惜しまれるのも当然であると思われるものに愛 (amor) という言葉があるが、この言葉は Dante の作品では、他の言葉にもまして基本的な用語となっているものである²」と指摘している。この二人の違いは、Beatrice との関わり合いからも推し量られる。つまり、辺獄にあった Virgil が関わった Beatrice は、人間、詩人としての能力の頂点における、しかも、それを超えるものとしての理解力に基づいており、一方、Virgil が去った後、Dante が再会する Beatrice は彼の神秘体験の発端に位置していて、Virgil にはもはや関わりのない存在となってしまったということである。Virgil が Dante に「理性に関することなら何なりと私はきみに教えてあげるが、それから先は信仰に関することだから、ベアトリーチェを待つがよい」（『浄罪篇』第18歌 46-48）と言ったことは、この辺のことを如実に物語っているものである。だからこそ、Dante を天上界の入口まで導いた Virgil は、この先は我が眼は及び得ないと言って Dante と訣別するのである（『浄罪篇』第27歌 127-142）。つまり、「地獄」から「煉獄」を経て「天国」に至る Dante は、Virgil の「理性」を「光明」として、キリスト者の Beatrice の手にゆだねられたと言ってよい。しかし、Virgil と Beatrice は二項対立的に相反するものと論じられるべきものではない。言うなれば、Beatrice の「愛」だけでは Dante を救うことは出来ない。Beatrice の「愛」（キリスト教）を得るためには Virgil の「理性」（古代）を必要としたのである。実際、Beatrice が Virgil に現れる仕方（『浄罪篇』第29歌）は Burckhardt に言わせるなら、「ローマ皇帝の凱旋から

1 *Ibid.*, p.148.

2 *Ibid.*, p.147.

形式を借りた」¹もので「古代」性を抜きにしては考えられないのである。つまり、『神曲』の中での Dante と Virgil の「出会い」は、そのままキリスト教的世界と異教的世界の結び付きを表しているものであるが、Virgil の中に、既に、この二つの世界の要素が包含されており、Dante がそれを引き出したと言ったほうがいいのかも知れない。

Eliot が、Virgil の特質の主なものの一つとして、キリスト教の要素となっている労働 (Labor)、敬虔 (pietas) とともに、「ホメーロスの英雄たちが誰一人とも分かち持つことが出来ない」「宿命」(fatum) を挙げ、Aeneas を「一人苦しみに耐え、ひたすら服従することによって行動する……キリスト教的英雄の原型である」と見、彼を「運命の人」(a man of destiny)と呼んだのは²、Virgil の中に「異教」と「キリスト教」の二面性を見たからなのである。一般に、Virgil は異教とキリスト教世界との間に橋をかけた第一人者と見られる。つまり、Virgil は中世の教会に於てキリスト教徒なりと認められたことである。というのは具体的にキリスト生誕四十年前に、Virgil が執政官 C. Asinius Pollio の子息の生誕を祝して書いた『田園詩』第四番 (*Ecloga IV*) が、旧約聖書の『イザヤ書』のいわゆるイスラエルのメシヤ予言ないしは終末予言に類似しているが故に、キリスト生誕を予言せるものと解釈されたからである。このようなことから、当時の学識ある僧侶は *Aeneis* の中にもキリスト教に関するアレゴリーが含まれると牽強附会して、Virgil を David や Isaiah と並ぶ予言者として取扱い、異教時代に於けるキリスト教徒であったとして、彼の靈魂のために祈禱し、その詩句は僧院に於て公然と読むことが許されたのであった。本稿ではこの Virgil の *Ecloga IV* に纏わる黙示的ヴィジョンの由来を問うことではないので、このことに関してこれくらいにしておくが、Eliot もこの事実に着目し

1 ブルクハルト、柴田治三郎訳「イタリア・ルネッサンスの文化」『世界の名著56』（中央公論社、昭和54年）、p450.

2 T. S. Eliot, "Virgil and the Christian World." *On Poetry and Poets*, pp.144-147.

て、この *Ecloga IV* に関して次のように言っている。

この一篇の詩にまつわる神秘は、キリスト教の教父たちが、問題にしはじめるまでは特別の注意を引いたことはないようである …… ラクタンティウス (Lactantius) と聖アウグスティヌス (St. Augustine) はこれを信じ、中世の教会全体とダンテもこれを信じ、ヴィクトル・ユーゴ (Victor Hugo) でさえ、彼なりにこれを信じていたものと思われる節がある。¹

実際、Eliot は Virgil を「新旧二つの世界を結びつけている」² ものと見、*Ecloga IV* を「キリスト教世界を予表している (anticipate)」ものであるの述べている。³ Eliot のこの Virgil 解釈は彼自身が認めているように Theodor Haecker の *Virgil the Father of the West* の議論に従っている。⁴ Haecker によると、「ウェルギリウスが生まれたのは、キリスト到来のわずか数年前であり、それは古代異教が予期された限界に到達する時であった。」つまり異教の英雄的行為はキリスト教的神聖さに帰せられローマ帝国は教会に変えられた。Kermode は、これは恩寵 (grace) によってなされ、古代ローマ帝国は神聖ローマ帝国と教会の型 (type) として表わされ、Virgilこそ、この行為の象徴であると言っている。⁵ Kermode がこの「型」と言う言葉に「予型論」(typology)

1 *Ibid.*, p.136.

2 *Ibid.*, p.138. Erich Auerbach, "Figura," *Scenes from Drama of European Literature* (University of Minnesota Press, Minneapolis, 1984), pp.67-71.

3 *Ibid.*, p.138.

4 *Ibid.*, p.138.

5 Quotations in this passage are from *The Classic* by Frank Kermode, p.27. Cf. '[B]y the action of grace the ancient roman Empire is revealed as a type of the Holy Roman Empire and the Church; and the symbol of that action is Virgil. Whatever happens in history - decadences and renovations, incursions of barbarism, heresies more or less successful - the Empire remains unchanged. It is from this belief that Eliot derives his universalist or imperialist classic, the classic of 'la Latinite tout entiere', binding upon us even if by race, culture and language we are apparently not Latin at all. The Empire is the paradigm of the classic.' (*Ibid.*, pp.27-8.)

の意味を込めたか分からないが、Haecker は Virgil の中に「古代の異教の世界」を失うことなく、すべてを携えてキリスト教的世界に架け橋を架けようとしていることを見抜いているのである。『神曲』において、異教の徒である Cato、Statius が浄罪界で、Trajan そして Ripheus が天堂界で、それぞれ救われているのに、Virgil だけが、何故、救いもなく「永遠の辺獄で苦しむ」のかという問題はきわめて興味ある問題であるが、少なくとも、このことを見抜いた Eliot は、²Haecker と同じように、Virgil の存在をただ単なる異教徒としてだけ取り扱ったのではないと言うことだけは言える。

この考えは、あの世の次元で実現されるべきものの部分的なイメージ、あるいは、地上的なものによって天上のものを表わす一つの予表であるとする Erich Auerbach の言う「フィグーラ」(figura)の要素を孕んでいるものである。Eliot がこの「フィグーラ」について、どのような考えを持っていたかは定かではないが、この考えは Auerbach よりも前の1920年に出版された *The Sacred Wood* にある“Dante”論に、彼の詩に描かれた風景、また、彼の Beatrice 解釈——Dante の愛は、地上から天上へ赴き、人間の知力の解しない恩寵に満ちた Beatrice に向かって行き、最終的には Beatrice は聖母マリアに一体化されて行くという見方——に見受けられる。³このように考えると、Virgil は単なるキ

1 Cf. Kenelm Foster, O. P., *The Two Dantes and Other Studies* (Berkeley: University of California Press, 1977), pp.137-253 and Robert Hollander, “Tragedy in Dante's Comedy,” *Sewanee Review* 91 (1983): pp.240-60.

2 ‘The souls in purgatory suffer because they wish to *suffer*, for purgation. And observe that they suffer more actively and keenly, being souls preparing for blessedness, than virgil suffers in eternal limbo. In their suffering is hope, in the anaesthesia of Virgil is hopeless; tht is the difference.’ (T. S. Eliot, “Dante,” *Selected Essays*, p.256)

3 *Ibid.*, p.274. Cf. ‘For Dante the literal meaning or historical reality of a figure stands in no contradiction to its profounder meaning, but precisely “figures” it; the historical reality is not annulled, but confirmed and fulfilled by the deeper meaning. The Beatrice of the *Vita Nuova* is an earthly person; she really withheld her salutation later on, mocked him, mourned for a dead friend and for her father, and really died. Of course this reality can only be the reality of Dante's experience - for a poet forms

リスト教に関するアレゴリーではなく、異教世界とキリスト教世界の二つの世界を合わせ持つものと考えられよう。

III

ところで *Four Quartets* の “Little Gidding” II の中に、Dante が亡き師と出会う ‘Recognition Scene’ の一節が見られるが、この場面は Eliot が「地獄篇」第十五歌を踏まえて、この地上の世界へ彼岸の世界を持ち込んだものである。¹ ここに見られる「見覚えのある寄り集まりの亡霊」に関して Grover Smith は「引喩と模倣の驚くべき群がり」² と言って、さまざまな詩人、作家を連ねているものの、Virgil はこの中に含まれていない。Eliot が “What Is a Classic?” の中で、Virgil を「ダンテの巡礼を導いた偉大な亡霊」³ と呼んでいることを思い起こすなら、Eliot はこの場面で、当然 Virgil をも重ね合わせていたと考えられる。このことはこの一節に見られる「木の葉」(leaves) のイメージによってもわかる。確かにこの場面にみられる「枯葉」は Dante を通した Shelley の暗示があり、Eliot 自身 Shelley の “Ode to the West Wind” の一節を挙げ「これは『地獄篇』なしには不可能であったでしょう」⁴ と述べている。多分 Eliot の念頭

and transforms the events of his life in his consciousness, and we can take account only of what lived in his consciousness and not of the outward reality. It should also be borne in mind that from the first day of her appearance the earthly Beatrice was for Dante a miracle sent from Heaven, an incarnation of divine truth. (Erich Auerbach, “Figura,” *Scenes from Drama of European Literature* [University of Minnesota Press, Minneapolis, 1984], pp.73-4). 拙論「T. S. Eliot の風景について」『英文学研究』第66巻第1号(日本英文学会、1989)、pp.29-32.

1 拙論「T. S. Eliot の風景について」、p.31.

2 Grover Smith, Jr., *T. S. Eliot's Poetry and Plays*(The University of Chicago Press, 1965), p.290.

3 T. S. Eliot, “What Is a Classic,” *On Poetry and Poets*, p.74.

4 T. S. Eliot, “What Dante Means to Me,” *To Criticize the Critic* (Faber & Faber: London, 1965), p.130.

には「地獄篇」第三歌「秋になると木の葉が一枚一枚と散り、ついに枝は地上にその衣をすっかり脱ぎ捨ててしまう」(112-114)の一節があったのだろう。しかし、「木の葉」のイメージは *Aeneis* VI で Virgil がアケロンの川でカーロン (Charon) の所へ亡霊達が群がる様子を「秋冷の始まる時、森の中にて地に墜ちる木の葉の如く¹」と歌った所にも見られる。Dante がこの Virgil の一節を読んでいたということは明かなことである。このような「木の葉」のイメージの系譜からして、Eliot の亡き師と出会うこの一節に Virgil を読み込むことは決して無理なことではないだろう。そして、この亡霊は「自らは享受することが出来なかったヴィジョンヘダンテを導くことがその任務であったように、ヨーロッパを、彼がいまだ知り得なかったキリスト教文化へと導いた²」のである。『神曲』に見られる Virgil は次のように Dante に別れを告げたのである。

わが子よ、一時的な火と永遠の火を
眺め、これから先は私自身が
知らないところへきみはついた

.....

それゆえ私はきみの上に王冠と宝冠を被せよう。

(「浄罪篇」第27歌 127-9)

Eliot に見られる亡霊は「老年の賜物の数々をここに披露して、君の生涯の努力に栄冠を与えよう」(Let me disclose the gifts reserved for age/To set a crown upon your lifetime's effort [“Little Gidding”, II]) と言って、一つの人間の智慧の総決算のようなものを箇条書にして、ペシミズムの雰囲気漂わせている。³つまり、この亡霊は、この箇条書の最後にある言葉を使うなら、「あ

1 邦訳は田中英央・木村満三郎訳『アエネーイス』(岩波文庫、昭和16年)によった。

2 T. S. Eliot, “What Is a Classic,” *On Poetry and Poets*, p.74.

3 拙論「T. S. Eliot と Swift—「絶望」と「懐疑」を中心にして—」『文経論叢』第19巻第3号(弘前大学人文学部、1984)、pp.105-7.

の浄めの火に救われぬ限りは」(unless restored by that refining fire)「ある種の情緒的黄昏」である「永遠の辺獄で苦しむ」のである。この「浄めの火」は Arnaut Daniel が身を清めるために進んで浄火に身を投じた煉獄の焰である。このようにしてこの亡霊はこの場を去るのである。

Eliot がこの亡霊を「黄昏」時に登場させ、ペシミステックな言葉を言わせて、この場を去らせてしまうのは、彼が Virgil の中には Dante に見られる「愛」(amor) が見出だされないとしたことからある程度、諾くことが出来る。Dante の「愛」は、前に触れた Eliot の Beatrice 解釈に見られるように、『新生』から『神曲』に至る過程で、神の愛によって、情欲から人間的愛に浄化され、ついには、神秘主義的愛に変容して行くのである。Virgil には、このような「ヴィジョン」が欠けていた。このような立場からするなら、Eliot が *Ecloga IV* を「キリスト教世界を予表する」ものと見、Virgil を「新旧二つを結びつけている」と言った彼の考えは、この“Little Gidding”の場面とどのように結びついて行くのだろうか。

“Little Gidding”に見られるテーマは、如何に、神と密接に直結し、如何に詩人が非時間と直接体験しているかということで、このことは、この詩の最後が、浄めの火と愛の薔薇が一体化したイメージで終わっていることから推し量ることが出来る。実際、この詩の冒頭の部分の風景には、冬のさなかでありながら、心眼に写る六月のペンテコステの火のイメージが「枝の焰、炭火などよりもはるかにきつい輝きに、おし黙った精神は振り動かされる」(glow more intense than blaze of branch, or brazier,/Stirs the dumb spirit)という形で表わされている。G. Smith はこの部分の「枝」に Virgil の「金枝」(golden bough)を指摘している¹。Smith の出典探求は、時に、その源泉、パロディだけをとり出して指摘し、その意味するものを言及していないところがあるが、この部分に関しても、そうである。しかし、この Smith の指摘は Virgil を「キ

1 Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p.286.

リスト教世界の予表」あるいは「新旧二つを結びつけている」「フィグーラ」と考えるための糸口を与えるものである。つまり、*Aeneis* VI で Cumae の Sibyl が Aeneas に冥界にはいる前に下界の女神のために「金枝」を捧げるように命じるのであるが、この冥府下りは、そのまま死者との語らいを扱っている“Little Gidding”の世界に当てはまるのである。この死者との語らいは、この詩の中で「死者の語るその舌は火で、生者の言語を越えたものだ」(the communication/ Of the dead is tongued with fire beyond the language of the living) という一句で凝縮されているが、この「焰の舌」のイメージは、ペンテコステの火と同様に、「霊の交わり」なのである。この「火」の象徴は、先ほどの亡霊の語り草の中で、「あの浄めの火に救われぬ限りは」と言う言葉に重ね合わされている。この異教である Virgil の世界とキリスト教的世界の二重写しは次の一節にみられる「二つの世界」というところに如実に表わされている。

For last year's words belong to last year's language
 And next year's words await another voice.
 But, as the passage now presents no hindrance
 To the spirit unappeased and peregrine
 Between two worlds become much like each other,
 So I find words I never thought to speak
 In streets I never thought I should revisit
 When I left my body on a distant shore.

「二つの世界」を空襲によって荒廃した現実のロンドンと冥界の地獄ととり、これらの世界は「似たりよったり」のものであると解釈することが、一般的な見方であるようである。しかし、本稿の立場を踏まえて考え、こここの「はるかな岸边」は、*The Hollow Men* IIに見られる「腫れ上がった川のこの岸边」と同じように、*Aeneis* VIの「アケロン川」を想い描いているということを考慮する

なら、この「似たりよったり」の「二つの世界」とは、Virgilの世界とキリスト教世界とが二重写しになった世界と解釈することが出来よう。この重ね合わされた世界に於いては、「浮かばれぬままに遍歴する魂が行き来するの何のきまたげもない」のである。この「二つの世界」の二重写しは、そのほか詳しく調べるなら、いろいろなところに見出だされることと思う。Eliot は *The Waste Land* の女予言者 Sosostris を *Aeneis* VI の Cumae の Sibyl に重ね合わせ、その二重写しにキリスト教の世界を滑り込ませて言ったのではなかろうか。つまり、Virgilの世界は、Eliotにとって、異教の世界をそのまま残しながら、新しいタイプを予型し予期するタイポロジーの要素を孕ませている「フィグーラ」なのである。

このような Eliot の神学的な考え方は、抽象的な議論としてではなく、今、見た詩の中に、風景の中に¹具体的な形で打ち出して行ったのである。このことは Eliot がギリシャ悲劇を素材にした *The Family Reunion* でも Eumenides の中に Erinyes を孕ませることで、ギリシャ悲劇からキリスト教的世界への移行を打ち出して行ったことにも見受けられる。²従って、Eliotにとって、Virgil は、単に古典の特質を満たしている文学上の問題だけではなく、Virgil をラテン中世の予型的歴史解釈の立場から、異教とキリスト教との融合と見て行ったのである。つまり、Eliot は「古典」という装いの下で、Dante に導かれてラテン中世の世界に導かれ、Virgil に「出会い」、そこで、その意義を読み取り、時折、その経験を彼自身の作品の中に組み入れて行ったのである。

* 本稿は東北英文学会第43回大会（秋田大学：昭和63年度10月9日）のシンポジウム「T・S・エリオットの知的展開」の講師の一人として発表したものに加筆修正したものである。

1 拙論「T. S. エリオットの風景について」『英文学研究』第66巻第1号（日本英文学会、1989）参照

2 拙論「*The Family Reunion* における見えざる Eumenides をめぐって」『*T. S. Eliot Review*』No.1（日本 T. S. Eliot 協会、1990）、pp.13-29参照

What Virgil Means to Eliot

Shunichi Murata

T. S. Eliot, in his *Times Literary Supplement* (March 14, 1924) review of *Founders of the Middle Age* by E. K. Rand, 'a Champion of the Latin tradition,' under whom he had studied Latin at Harvard, pointed out at least two theses which run through the whole of Rand's book. One is the continuity of pagan and Christian culture in the Latin tradition, which is closely related to my paper. The other thesis is 'in the guise of jocular slaps at Mr. Paul Elmer More' whose contention is 'for the superiority of the Greek over the Roman tradition in orthodox Christianity.' Considering that Eliot appears to have looked back at his course with Rand and possibly at more personal meetings with him, I should like to think that Eliot valued the Latin tradition. In fact, in his Presidential Address to the Virgil Society in 1944 entitled "What Is a Classic?", Eliot answered, with Virgil particularly in mind, that 'whatever the definition we arrive at, it cannot be one which excludes Virgil.' For Eliot, though his poetic dramas were based upon Greek tragedies, the Greek tradition did not form the basis of his idea of 'the classic'. Greek tragedies are only a means of dramaturgy. Why did Eliot value the Latin tradition, above all, Virgil, rather than the Greek ?

It is true that Eliot applied the characteristic which he attributed to 'the classic' to Virgil. But, my purpose in this paper is to show that Eliot does not use Virgil only to explain 'the classic.' This attitude of Eliot toward 'the classic' is shown in his view of culture and history. Behind Eliot there is the Dante whom Virgil looks up to as his father. Dante, who exerts 'the most persistent and deepest influence' upon Eliot, is guided by Virgil from the

dark wood through the descending circles of the pit of Hell (inferno), where he meets the antique poets (*Inferno*, IV, 78ff.). E. R. Curtius called this group 'la bella scuola' and explained this meetings as follows in his *European Literature and the Latin Middle Ages*:

Dante's meeting with the 'bella scuola' seals the reception of the Latin epic into the Christian cosmological poem. This embraces an ideal space, ... in which all the great figures of the West are likewise assembled ... But the realm ... was to be found only in one historical complex of European culture: in the Latin Middle Ages. There lie the roots of the *Divine Comedy*. The Latin Middle Ages is the crumbling Roman road from the antique to the modern world.

It is this contact between pagan and Christian worlds that is an essential element of Eliot's Virgil. In short, Eliot 'makes a liasion between the old world and the new' in Virgil who is representative of the Latin Middle Ages. This idea implies the 'figura' by which Erich Auerbach interpreted Dante's *The Divine Comedy*.

Considering thus, it is true that Virgil fulfills the characteristic of 'the classic', but he supported Eliot's historical and theological viewpoint. Eliot sees 'the old world and the new' into the meeting of Dante and Virgil and often shows a trace of 'two worlds' in his poetry.